佐太乃和事

863
66

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66

ガラス使用

和露文庫

八塚のわたり

863-66

画圖をよくせんとのぶまれ風
性を志すべしとかりまを近の人ゐ
元信の心水の法をもと其風情を
えがくの教成べしと雲者伊家氏
河内國より平振沖の恵源さ
作その墨に住て画れ面白を初

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

連歌は世の中月こゝの藤と列
和哥は柳門之世のもてはやうくわきて
泝潛は五流秋の代こゝふ於ひて殊に日
世事の哥句集を神のさゝ事
をゝん事公思ひてゝ玉こゝれ友こゝち
のゝとゝへをし集か編こゝ問こゝ侯の

枝葉静ふゝ月の雪れ一事も除け
秋の紅葉れいろもまゝ侯こゝ多年植
根ふ雪落積て大集ふりぬ之侯
ふまゝう紙家迄撰て秀吟冊氏
毛ふ世こゝ流秋れ泝潛の世こゝれ
川先ん閑淑世ふ世こゝすさゝ秋

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

石の苔敷きを世なれの色の
ちきせぬ一葉ぞ忘れい頭して
作たれ見てうりと寒とるぬ

中之城

安永三年仲春　南畝
書

巻頭

月花れ元文の昔身や色忘老　養父　古道
涼しさや微うぬる老へ若　佐太　鬼卯
十六夜や何西うもいもれて竹れ寄　同所　隙川
樹へ迄さ寄又寒るし〻拙哉　大坂　宝白
重さ小夢も出ぬうよ書の雲　佐太　彭礼
吹め夜も寒をよ涼し沈の月　茨木　里杖
新涼し奥の剃手杜若　福良　金毛
秋の日や屠れ使を活潮小蕾　鳥養　吾栖
鳴虫を〻晩をかたきに　佐太　長洲
盤蛙を織ぬけて空の綿　同所　鵜天

行遠く人去奥きふかき　深野　里攫
夕撞ハどこれ　鐘　夕の海　福良　谷義
夏木立りてくて　松も黄葉　横葉　玄芳
川向ひ更り遠く　大坂　百之
折く火れおちへ　同所　楚岡
旅ハうし歩行しも　西面　雪枝
命もの尽つくぬ　福良　一千
涼しさを重ふ数えて　富田　魯雪
明てゐる窓ふ立こし　佐太　谷蘭
夢覚ます一雨清く　木屋　亀樂

名月や松を離れて　中之城　南畝
翌ハ吹雪の名残の笠ゐ事　大坂　美義
蝶しの落立て　佐太　立恩
名月や袖を乞ふる樹くの哀　鳥養　連史
海ふをハ数て見る猫の事　阪川
山吹や流れへうる片折戸　大坂　二鶴
来ると寄よて屋の柳見ル　深野　金亀
文月を花漬こ屋ル　佐太　文貫
境内の蕎麦しこ紅葉ゐふ　大坂　魏雀
帆の風の雁変れ尾ル　同所　南花

牛の耳燕遊て行まかな　目垣　百畮
兎道のよの要害ハよし螢かな　都濱次　花来
見へ隠せハ鳴子の沖や稲の浪　茨木　筵菓
よそよその已をともにれ寒さかな　菖蒲　如藍
石山や積て出し雪の丈　佐太　魚文
山川や落葉出て来る壱の水　十日市　田義
若竹や何よその出る松の例　桂本　提蒸
日盛や蚕も入江の松の影　福良　東明
蟬売かかるせて撫る衣砧り　大坂　山珣芽
菊の間や盆も灯て読書の額　禁野　亀計

這入蛇穴をぬりむく小麦哉　脈川
名月や諸白一斗枚百遍　奈良　万吹
ふ梅や薮ふあをかれて来る匂ひ　大坂　黄稜
子全を果して袷一下日哉　深野　圖城
積ひよ来さとふかな時鳥　五日市　柳條
行舟のちらちらとかれちよと涼し橋の数　福良　芦邦
両端を角いて擂や嫁菜　大坂　蔭城
一盛をたてまよ暦中の暦　同所　羽律
草よ康く盆をともうつく鶉哉　同所　丁東
来る暑さ防く菊花の徳かな　禁野　卦士

元日や ちひさきぬかの神（佐太） 臨川
三日月や 横ゝ雲ある海の面 巻雲
涼しさの夕日ゝ足しぬ言霊 二鵬
落雁を 賞人とうりや 年代市 鵜天
雲の峯 泊うゝ 弁もあ 交り 鬼卯
雷の 捧ゝ 未 離 生て 神言 水（大坂） 有風
暑さ 去や 指うゝ 川へ月も 下り 魚文
高ゝ 金の 裏ゝ 日の 照 高 花 水 百之
山 市や 紅 紫ふ 蓮 高 屋の 月 一千
去 猿ふ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 雪枝

彼岸 ゝ ハ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 原 水 里枝
行ウ出 ゝ ハ 又 連 ゝ ゝ ゝ 水 原川
胡麻や 指の 屋ゝ ゝ ゝ ゝ 名 所 ゝ（茨木） 路樓
蓮 家の 教 入 ゝ 彼 川 小 ゝ 水 吾栖
葉 揺や 花ふ ゝ ゝ ゝ 枝の 伸ゝ 鵜天
先 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 家 ゝ ゝ 五思
鈴 虫や 胡ふ ゝ ゝ の 秋 幾 日（坂） 負徒
稲 ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 月の 星 ゝ 冊（西面） 棠林
一 声や ゝ ゝ ゝ ゝ 流 ゝ 月 川 魏雀
繩 月 揺 ハ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 花義

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

西畠小しく伽藍をさハぐ雲かな　一子
二河内　茅ヶ崎より江の島へ渡る
橋さゝゐ戸明て夜の月　大坂　東鳥
涼しさや松に笠掛け眺る　江の島　其笛
石山の日をとゝめて涼る　蓮芳
夕立や流を送る蛍狩　十日市　貝治
風や月ぬけ殻の蛻　二鵬
枝垂るの見る目小雪の柳かな　永礼
名月や裏うつ通る舟ばうり　里樓
雲二ツ橋の中ゝ雲の色　南嶽

窓際へ物さゝ事ぬ暑さう事　除川
月新小日南の殘る紅葉哉　敦賀　其雪
武義堅や矢竹ぬさう天ぬさう　一子
紅葉ちるせぬの玉はけちく蔭りか　里枝
似彩鏡の表ゝ面ゝ葉紅葉　著衣　梅枝
子年の耳を引こう小松ヶ郡　兵庫　蕉洲
雲の音や昼休んこう社ゝ竹　尼卯
身時て西国引合名所かな　大坂　桃一
涅槃会や雲食ハ明て茶毘　雲枝
留ゝ雲れ無へ日の入さゝうれ　福良　芦仙

春風や帆ハ宮をより濱屋敷　須本　忻然
行衣お求りて行ふ稼ぐ車　鵜天
若葉や子ハ長に谷を走る　除川
扨も一日咲てはかさく哉　一千
猿沢や鹿の声ふる月れ新　岡城
蒔の夜やたゝ浪の河　金乃風　鮎点　雨竹
神年や井の子ふる薮つゝき　芙蓉
春風の船へ吹えぬ汐干哉　素白
泣子のかいとゝえうり鶏の神　星枝
鶯の除ふよん多玉柳　筠笑

春見ま八古代ものよ氷面鏡　佐太　臨川
神さくく多ふ高ふし教の書　羽律
出離して見の音さや松の月　里櫂
涼しさや仏ハ御ちても風の枝　魯多
彩花の寄ても近し門の松　里枝
多の春て俗名を分るや素霊　文貴
踊子の袖のかさ多ふ月おそ　楚畏
昼の春ハ打さしてゝ廉れ声　鬼卵
名年ハ春ふもしも多ふし錦れ多　京都女　湖柳
ふるもん配ハやを多の衣　一千

蝉ハりく先へ来て居る揺哉　彩礼
水面の立つたくや川の面　花蘭
涼しさや性てゆ中ぬ竹の面　東明
奥山や なほ静りぬ盆の月　陳川
昼点や居ながら石れ古九　大坂 鳥掌
稚子も多といふさし蛇の雪　出洲
夕鳥や庭ふく年の餐恵迄　巷義
年浪を多もいとふて氷り申　吾栖
水月るや琴添めても稽の反り　三名 押雪
筆や又 院落ふん自ら迄　意白

蕎や八月以後のうのかうり　雪枝
画北梅も世外呂ゝ冨哉　木本 吳雪
柚咲ひの清水夕巴の清水　鬼卯
房ゆ二る門ふまさせて数巻哉　陳川
多ふりのハ菴の人ゆり猫麻　魏雀
蛍巻の川へ毒ふ蛍哉　春芳
明猿もなつさふ文衣　二鵬
末枯ハ谷川もあちゝ哉　木屋 孤嘯
涼しさや弓も穿りぬ松ぬ弦　佐太 柏枝
毛ゆ小ふ留寄を新て踊哉　意白

猫つゝや足ふ茅くぬの名場　除川
永さりや涉多うゝ繁ふ又　一十
花石の間ハ踏さる　袁ゝう事　菜蔬
眼ハ見ゝメてまさ教ハ涼し家れ栖　百之
夕月ふ梵海ハ笠抜く侵うふ　大坂木虎
木ふ涉ゝ笠ゝふまゝの日新哉　鵜天
押ゝふ人ハ侍うぬゝ鶏ふ　五恩
海棠や紫蘇仲輿のゆり加減　冬葉
折目見てこゝ教ふ掛う事　西面里栖
こゝ見仲こゝを見せる哉りふ　皃卯

雪ハ細ー谷を流し来洗ひ　二鵬
雪ゝ文こゝて来うゝる跡ゝう　除川
花ゝ蝶ふしゝふのゝうぬ火神ふ　文貴
拾舟や白ゝ菖蒲の高れ鎌　魏在
作係雅の連てこゝゝる布子ふ　星枝
蟲う香を夜の葉や神酒　之白
涼しさや人も所漕の岩の上　金毛
沈叩施行しゝと水鶏ふ　吾栖
花く紫ゝ藤のゝきゝせ哉ふ　百之
能因の家も系越の良夜哉　南瓶

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

巻頭

柵とゆるされて雪のゆるさぬ冥哉　茨木　蓬巣

蟹穴と空ふるけさしら露月　路撞

庭い蟹のこゑさもこそせるこゑかな　立恵

日の向く蕗とゆ蕗の芽　永礼

藤ゑし屋風ふるこゑかさ沼　除川

年始状ゆといふ沼の返事哉　鵜天

蕗の名ハ木蕗とちるや雪枝　雪枝

氷うゝ湯と氣ケ沼し氷室哉　抵川　河子

涼しさや蕗うとゝふたもたゝ　百之

雪の氣稲ハ日うゝもこ雪の上　大坂　橘芳

杓脊て人を歩ける山巡哉　長洲

仰向ハむゝ住めさし蕗の地　穂積　鵜遊

恠猿て風を待のゝ舟　大坂　文窓

蟹さ冨士のさても遠ゝ沼歩　一十

蕗さゝゝや蕗ふ氣けさ空ゝ入　兎卵

松ふ蕗ゑて お歩ける歩ける　除川

森ふ蕗ゝゝ蕗ゝて蕗ゝ蕗ゝ　春芳

涼しさや氣の沼の沼所　東明

蕗ゝ蟹月や蕗ゝゝこゑ蕗ゝ蕗ゝ　棠林

大の字ハ楷書ふ蕗ゝ蕗ゝ　図城

沈涼し末未ハ青さ　松の新　巷義
灯ともし月小家　秋の月や月今宵　楚圃
夕凪や汐合へこぶ蓮の蓮　鰐天
大小迄家へ蓮も濡ぬ拍子水　百之
傘もなく濡さく人ぶく雲ふり　雪枝
客いのも揺よ近し蓮の雪　南畝
涼しさや枝ちぬ風は迄入窓　田義
梅咲や仏くの小ぶ舟　坪井　弾水
田く畦やこちらを切も蓮水　除川
秋雨や屋根ふる虫の客　兒卵

胴山小居てもまぬく　鄭蝸式　寒白
こぶ水ふけまし蓮の蓮　百之
拙咲やもし有てきの小此雛　一千
之吉世や邪合六田の花の雪　連史
花をハ雪て包むし世式　文貫
秋淋し蔓てふく老の蓮　永礼
風を川向ひなり　松　柏　除川
蓮ぬ居合の太刀小　揺り那　南飛
しふや蓮を朝日山　巷蒙
坊也り菴之の子世蛙拾ふ　春意　鹿

大海をよて芳匂ふる伊予が　里扶
蒲子や　風の芭蕉の　袖波　吾栖
春れ雲や　京ぶ入ゆふ嵯峨　百晦
夕影や　角川遠る　舟の蝶　菓苑
春の野や　茅お抜ふ　笠の紙　玄芳
沙あられ　ふるうぬ　梅花　中田井　卯砂
寄ふるぬ　旅の一　歩ても　月　笹菓
茅や　木のめも　ふみ　但繁　鴨天
涼しさや　魚も　氣付ふ　川　金毛
曲水や　山　抱　堂も　恋さ　魏雀

巻頭

盃れ　中を　都　や　ふの月　茨木　仙真
ふ人れ　足音て　ふし　羽一葉　長洲
老さ　ふ　ふ　と　翁を　高丘霜　里扶
猿　ふ　ふて　ふ　郭公　如蓋
獨ふを　志　ふ　敬　彼岸ふ　吾栖
業　ふを　ふ　藤を　抱く　ふ　除川
能　ふ　せ　ふ　ふ　樂ふ　ふ　桐花　春芳
花れ　ふ　環の　ふ　瑞の　窠　玄白
玄の　琴や　鏑入て　歪菓子　菓笹　鬼卯
長宝　さや　史　徒　ふ　ふ　古戦場　巻茶

新緑や日南へ来雪なる孔　永孔
北丘寺の老用へむかうめ木梨ガ　魏雀
涼しさや行う彦なきい松の敷　貝治
はもうか秋はうつふく田植哉　亀乗
川小川辺道ゆる暑さ哉　芦邦
蕎を解さ言の沓をー初時雨　慈竹
大佛の目の下をるの郭公　苍葉
猪豚をん家しし虎ちち　岡城
肩を猫へむをんてるー糸猫　鵜天
来ぬるををのうの花や時雨　除川

夕白や湯谷を逆の三夏の　一千
鄙尾茅や雲と花と盈き合　二鵬
ゑゑ茅や午時平寿ゆ於原凡　里扶
和田へ物して中や月の雪　青枝
見えけハ碎へとのを見桃の汐　兎卵
和、拾若ガ沈　彷を市ガ拭　楚巴
ゑ清ー耀ガ嶋ゑ新　魏雀
陰涼ーたい物ゑふ居る暑を識　花義
鶯の尾や誰も下足を花の沈　永孔
春風や出ガ気ゑ船の舟　除川

行や雲客迄 初花をさそふ 吾栖
山越おそけり 淋しき磯うま 雪枝
歩行の迄繁夏しくの意外 一二十
旅をして湯殿道茶の嵐哉 高俊 快山
汲手洗桶へ引上月あうふ 路槿
ふるれし中 捨て滝見外 令毛
行もまさ入るめる入や夏月 鴨天
名月や小名も居れて赤山 二鵬
川口ハ和さけ唐しー書の朔 里枝
水ハ湯となりさ地獄と蓮外 除川

芸風も花て吹さめ 猶うなし 魯雪
春なれや毎小料理の一鍋り 花宗
涼しさや弱小柴折あくれ氣 一十
牛たうり肉ゑ毒て少く田唄外 禁野 可清
鶴鈴北赤摘む花や秋の蓄 五悲
蓮葉の涼もたまらぬ異外 里枝
門院乃菩提寺たん白ふり 白雪
去るや摘赤畑へ仕裏ゆ公 二鵬
寄の蛙ヶ蛙手如蹴伽の性来外 花蕊
消さ立け落花て埋め谷の宮 武湖

巻頭

光へて花ハ高雲に芳世哉　西面　雪枝

葉物や常ハ日の出る山て蕾　慈計

行月の光るまてひや沈の月　慈乐

短冊のやうか山田小田敦哉　吾栖

言仏なるも出さう秋世月　百之

入おや胡蝶追ふ行るの足　星櫂

風や歯神の画るの寄絵　二鵬

炭焼や山へ交ふ犬の声　金毛

言伝小花見新なる蛙の郵　古瓦

多仲や新家へ書き牛蛙夢　花来

水鶏や雲の峯へも登る足　除川

目の下ま字治見て菴の菓摘哉　言白

花つれて川の新ふ多哉　負抵

遥笛の梅見多へし誓願寺　楚岳

日ぬ新緑ま多西　河子

ぬるを見つめて異し母の内　文窓

雲の音や許由ら杓の捨不　慈計

未この象をとひや是なし春雨　春芳

山吹や秋て蕾もう所　慈乐

毋暮ま杉の絵もう横時雨　洛槿

舞衣の風流深し　麦秋　万吹
ふるし笠や雪もて作れる笠　蟾天
雪ふる日や木葉ふる人通　蟾托
掃朝雲を都ハ初花哉　百晦
ふうふふへ歯の雪ふる雪ふる哉　魯多
雪弁うう入日の暮くれ　彩孔
雪盤ふるまれてふの眠哉　延菓
胡蝶や一朝つの多流　都家　花桂
夕月を鴨の啼くく入江哉　花苑
ふて来る梅も見えうむの山　一千

梅の蕾の入雪かな　麦柳　大塚　東枝
鶏頭や蕊ハ又ふ小蕊頭　二鵬
風や雪けのぬけ風の吉　除川
落るを芭蕉ぬけ吉哉　吉枝
城内小面のさくの通ふ　楚岡
蟬るやふ蟬の鳴く秋の風　大坂　青舎
元日ハ新ハ歩ハけし春の月　菓苔
蕊のふ岩の多ふさく哉　菓宗
順童や一ッ清ふる水月川　吾栖
氷小も枝ある川ぬ流れふ　除川

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

若菜や百ふ郷ふる井れ孫　大坂　東葉

花也て　語の生へる氷の事　同竹　氷花

蝶しハ一輪つゝの花ゑ哉　雄歩　風明

入おろ世よ寄るまてもゑ哉　巻家

下西形り清て仕ヒし　京　南花

清士の史の　物　多し　竹ふ　皂卯

谷口を葉の出る山の紅ひ哉　一ヶ

庵松の大和育やそのの月　如盆

美美や多拾を振ふ　拾て出　我礼

月ふて花の猪を小ぎうゞ　里枝

冬天と木陰ハ何の世これ迄うゞ　佐太　臨川

諸とものゑハ合点を山さくら　春意

新浄瑠璃百の度の壁川哉　南花

ゑう親よ寄るゑ子し燕の巣　神田　蕪夏

酒鹿や巻出さ嵐　ゑ　ハ迄　一ヶ

三ツうハ日けう少ゝ筑戸鴻　夏白

蓬莱の清ゝて紙し　大坂　瑞馬

永きロや蛍毒の猪も　ゑう　魚文

松陰ゑ寄る士のうゑる　暗さ哉　夏白

初雪や目ゑう寄ゑ後の星　星猟

永きよや一るゝ年の馬の皆　除川
新玉てハ住くかいもなし年素　深野刀州
拾ふけ拾ふハのこゝ勢ハ主猪　里枝
春又入や宿へ別涼の日ゝ南り　魯竜
出雲ゝ法とハいひをかゝつゝ　竜白
市も市此一ゝ年を弁乃市　鵜天
法へ名ゝ連えおろせハさゝ　令竜
旅ゝん此節ゝ会せ帰庵ゝ　鬼卵
永きよや探ゝてけむ父の夢　花義
涼しさや庶ルへ庶ゝ永の客　二鵬

蝉てやゝ名ゝ蟲を出きこゝひ　除川
雑摂や彩ゝて彩ふて後ゝ客一十　福良
寿令ゝ神の長岡や海ゝ毛　楚調
散ゝ木紫吟ぬゝ名のゝ夕ゝれ　里枝
まゝ拾ぬ国庶ゝ乃一蒙ゝ南　魏雀
涅槃会や彩の月雪ゝ月皆海　我礼
蒙ゝ蒙ゝ乱の花ある宮ゝ哉　巻蒙
五月雨や中ゝ下弦の歯ゝ会人　文貫
秀鉢の行列蒙ゝ　鉢ゝの事　鬼卵
清ゝ気ゝ成てハ涼し初ゝ　長洲

端折るみ屋うち暖さかまさ　花東
何風か吹ても涼し岸の寺　益菓
お月而やちの末魚も游き出　雪枝
蕊ぬきの言静かなる山路かな　陳川
異へを俺ぬかも今浪の寒氣　百之
御戸あを拵ふ帰る様う車　吾栖
舟へ枝用ゆてよりや景の梅　楚湖
涼しさや虎ふ知りて風てぬ　一十
風のあるる氷を溶る柳う車　春芳
そそまきをうう西や糸拵　京都女 左耕

きしの寒の盈て花形ぬ　長濱 蝦蟇
虎も出影も出うう中の雪　三嶋 寸梁
登夕切稽くの書ふ　原雪ぬ　苔紫
紫さくや紫衣の沈も芝の中　二鵬
初雪や拵を細き仲の菴　兎汁
芝年の秋笑ミ民の踏うぬ　卦士
名月やまを芝こ寄ぬ揚の数　雪枝
拵やなん音もかくろうう衣　蟾大
ぬ拵や深てハ春さる僧ぬ丹書　菓茵
地境もあッしき梅の花　其雪

巻頭

昼遠き山の近さよ蓮の夢　佐太　五恩
霞あや吹き流の線の絵　吾栖
きぎすの鳴きけむ大空　鵜天
蕉の葉に虱うつるの書捨て　鬼卵
入て迷入障てるへ法門の月　里杖
初ふのや市の暮さも暮て流れ　二鵬
暮ーや涼しいうちよ咲て永　百之
夕迄き向の渚しの一葉哉　魏雀
西のうく月ひとりなり時雨　里櫨
涼山海や苫屋の蔓　芦邦

面白の裏ふもある巻紙　刀州
毛かしや新しの世代宮月哲　菜苗
いつを春の風をまく来ぬ哉　我拙
メ之後の日南に捜き日傘哉　楚岡
碁盤織仕也なり大海日　小樽　碩茂
日盤を須弥て居り本陣哉　緑川
苔外て涼海をもおとり哉　岡城
涼しさや恋まのうる塗壁　春芳
腸て滝乃明うる義り哉　南畝
日のた乃日ハ日て又せて時雨哉　宝白

山風をものさはうぬ 氷ゝ車　英猿
無理中りて下り居あり谷の梅　巻蕉
星の新さゝと敲て鶏舟ゝ　楚湖
十分の美小道見や　富舟　木鹿
言葉て繰る を繰く桜ゝ　隙川
風後　京を天下に言旋ゝ　連史
五月雨やさし上て居る浮世堂　二鵬
懺ゝハ男浪　鶏の芦辺うゝ　鯰天
浪桜の鳥をなぶる夕辺ゝ　有風
出るやあらぬ沢うゝ生さし雲に晩　兎卵

ゝ書や　神場ゝを少ゝ麻裃　宮白
さらゝ花まぜハかゝさぬ月ゝ　一十
巻ゝ文や　水を天　吾ゝ　川の砂　雪枝
志ゝや　数の南ハ　京ゝ　砂　東烏
蓋中を舟ゝ　あらぬ　異ゝ　魏雀
宮咲や　秘の月ゝ　花の兄　隙川
事を踏足も　猫ゝ　日新ゝ　长渕
時雨や　濡しゝ　侍ゝ　山相　須本　朶十
反張や　光ゝ　名ゝ　山大井川　百畝
萩萩と　車ゝ　苔ゝを　地ゝ　吾栖

涼しさや影のかさなる渡し舟　枚方　鬼助
秋さびぬ雲の月見ん宮寺　筑前　芽
雪ぞとハ又歩まるの袖うら　男枝
見せ姿や人より先ヨ義竹　魏雀
秋雲の渡しなのゑ宮仏　巻家
見ぬ恋しさ見ぬ恋ぶりや新樹陰　須本　虎洞
ふしぬ女や候よ候ふ土御門土　連史
二ふ山より仏さしくと急ぎ　百之
東雲や又九条もの一立不　楚岡
初午や世を見る城の壱眼読　二鵬

巻頭

白雨や蘇鉄ふ行をおかし　佐太　五恩
涼しさや谷の水香峯の松　青牧
秋うしい新ふ所まておとろ所　神田　埴猿
四鳥まくをひとけよりをさん　慈菓
涼しさや見ぬ月さ新ヨ服八月じ　一十
暖ヨ多ふ所と蒜の沖宮ふ那　鶴天
永ヨ日や雪居ヨ見る藤ふ翁　二鵬
見ぬの生姿こうも角力ふ　吾栖
冬川や板橋ふも夏氷　大坂　孤芳
雪人ヨ松さしヨ見る時面雪　保川

花よりなる春おすくなきかな　里枝
雛の夜や抱もえて玄々小燭斎　魏花
雪ふる枝例させてうゝ猫の事　巻蒙
入月を一声おしえ郭公　百之
ほく羽ぶや　ほいの月もみぶ川　文貫
鶯鳴石を沢を志しゝ雪在ふ　兎卵
淋しさや鹿のまぶ萩の癖　金毛
朝品や星の出て去又四下盥　花苑
春の雪や蒔ゝ濡ぬ牛の沓　雪枝
笠の雫やおもひてあり時雨　雪白

花の浪うゝしさの淺ふ　吾栖
移ふ拍竜をさゝの村長ふ　一千
ぬ近さ雪又上てハ　東明
稲くや山も雪をきぬさ地　楠芽
雪とても高れ雪や　如意院有馬　莫岐
深ふ白ハ松ゝ定まる　枯世ふ　棠林
まゝ風や辻能の行ふ　泥の上　二鵬
柳さく横ゝ又せふる世ふ　里枝
深しさや沼ゝ高なき帆の海　花菜
毛蓬雪ゝ彩後変て伏枯ふ　除川

生ハよきと孤のわるる　氷ゝ那　南畝
立まをまぐ居しまるなるを　百之
拙ゝ拙をうゝふ又ゆしふる　兎卵
房にても声もうゝ初恋を蛍　を白
嘯ゝ虎も吟ゝ　懶ゝ那　蜻天
夏草や雨を吉ゝまる水の吉　除川
移りものなくて清まく高紫ふ　楚岡
武庫山や子池月も入ゝ　二鵬
夏ゝと柳のゝふ世ゝふ　一千
ゝん仏目も方ゝくさ虫の響ふ　雨竹

名月や撥ゝ紫も照ひ　星枝
西の空を静ゝ入て居ゝ史捕式　除川
ゝゝ人ゝ夏へハ夏出仏様ふ　一千
蛍も蝋を鳴るせん　柳仏紫　孤蕭
短夜も皆ハ森さゝし　ゆゝ　春芳
横ゝゝる　蚊ふ冷れゝ夏蛍　古石
茶の花や何氏山の美陽居　巷薫
風や蒙ふ日のゝり月ゝ　文夏
ゝゝ梅や蕪て行ゝ史縄連　魏雀
空茶ふ新森ゝ蕎ゝ那　楚岡

巻頭

永き日は蒼ふてもなし夕雀　大坂　魏雀

夕ぐれ戸を竜の出そうな軒ばかな　芦邦

廉部て廉ぬ山のげる蒲ゑれ　陳川

逆流乃亦指さた沙弓ぬ　福良　風篁

永きも蒼しを蒼ぬるぬ蒼ぬ　百晦

鮫源や鶴の鶴を蒼ぬ祇　路槿

蒼ゑ降下詰小鶴ゑ蒼ぬ蒼　蘆菅

苦吟して塞ゑ月を鶴ぬ　二鵬

末ゑ咲ハ蒼も有ゑ蒼ぬ月　巷蘭

お月雨や移ゑ垣竜又山明ゑ　一十

神の鶴や下鶴ゑ訓ゑる者の山　烏掌

立留宝は恵ゑ源ゑ糸鶴　里枝

年若て御静ゑ鶴ゑ蒼の風　臨川

散に鶴ゑ廉ゑを御ゑ流ぬ　如豆

秦ゑゑ一陳日は天中ゑ鶴秦　黄稜

武義世小ゑも鶴ゑ星ぬ氣　春芳

雪鶴や神ゑ一被谷ゑ出　氷花

一里来て朝点ゑ恵ぬ鶴ぬ　宝白

蒼鶴ハ風ゑ鶴ゑ蒼ぬ　鬼卵

花の雪ゑ蒼ゑ恵ぬ源山ゑれ　巷蘭

蓮も五日紅もさらう事　蟾天
王仁乃まを迎といふめ　獨り　丁東
十六夜や我身さとにいまし悪し　貞徒
切るゆいもるさぬ之や　牡丹　金色
蓮の花や養の垣より出て　一子
るの庵く枝も出事ゆる　田義
仙猫ゆ乃と蘭の山法ゆ　忻然
体んてハ淩迎を高ゆ乃本蓮ゆ　巷義
蓮てゆ　蛩々ハ誰を　獨人（大坂）　君卿
炎天や影〳〵〳〵　遊く流の鮎　真笛

蓮池ゆ日ゆ　百畝
ゆゆ墨ゆ身ある蓮の　堤ゆ角　楚湖
泉水を抱ゆ蓮さき　暑さゆ　鳳明
山高も陰ハ例ゆ居る　蔭りゆ　我彼
夢ゆ目てあゆてゆ　歩ゆ　條川
涼しさや鶴て拾ひし　蓮目　雪枝
名月や硯ゆハ夜の海（都志）　蛙畦（小淺丘）
二日月後ゆを又ゆる　冬う那　乙貞
うゆ白や淺の隣の山ゆら　吾栖
迦川や足形ゆ夢　水　史海

みちのくの流れもやしら菖蒲根　有馬　雪下
夜桁ふハえうり新寒夜うそぶ　一十
松の風きのふ蕨をふる猟うふ　鬼卯
涼しさや月又えん亭又月又えん　二鵬
素面や素うさ傘のたくくし　南畝
加賀ゆゑと連立て来る燕うな　里栖
名月や毎の二階の森音曲　連史
秋来ぬと眼又さめうなうなの色　里枝
義頃へ花樗の出ふ世ふ　春芳
一新ハ蕨又ぬしし新戸哉　寒白

巻頭

羽をくくハ雪と花の鳥　佐太　巻蘭
ふ花や泳めか減ハ又ま花　大坂　羅文
卯巳や　蕨と沙ふさうし賞　五恩
散をえて素ものの秋も旅出ふ　陳川
春風や足のもの引く素の京　十日市　南絮
独合又えく新凍しう素の月　楚園
巳ふ素ハ閑ふく月の烏ふ　里枝
雪玉の雪へ雪ふ日新ふ　二鵬
胡貝の眠くもちふ踊ふ事　只弓
冬約ハし素ハ蕨と生ふ地　陳川

達の吉の松原かする月夜哉　里櫂
昔の温泉谷百年過ぬかな　烏堂
梅枝やまく葉ぬい出ぬ佐　里枝
ゆきてくれハ赤い色ぬ花を麦の穂　雪杖
その川越るうたゝめ七日月　松圭
古池や蛙飛こむ水の音　桃川　桃仙
云伝をつゝら河やゆ雪車仕　菓茵
投入て水の二俣へ柳ゝ雨　除川
日盛や蝉ゝ息ある谷の百　花義
咲るもや向ふも色さ淋しまん　魯多

寄て呼鹿ふさ〳〵し程の吉　春芳
咲る曙のこゝろ紅尾ゝ雨　素白
濡さや花迄さゝぶる巣れ松　棠林
岩原へ花元ゝ初しゝ物又ゝ　岡城
土圭屋の午時ふせハしきけるゝ　黄猿
家ゝ咲梅まゝゝしき際走ゝ　名張　風治
菜の花や三幅半ゝ長ゝ搭　一子
春の野や泳バ半んと出ゝ　文貫
降とゞつゝ二字迄吉やゝ春の雪　鴉天
咲ゝ花鳥もゆゝしく芭蕉ゝ　巷棠

嵐山花も京へもどる道を眼前　東烏
ゆくえも雲もまぎれなり　叶乃乃　東鳴
二日灸　景ハいひきの丈うゝ車　花義
洗髪ハ小掛て見せる弱縄哉　鵜天
文月のものすしあしい濱哉　嵐示
彩ハ歩行義ハ教むさゝる哉　金毛
比叡高し　絵の上ハ時る雪　臨川
名月の答も布しゝ夕日哉　彩礼
森ゝ中の松もかへぬ　景うゝ都　卦士
泊下駄て犯ハ入へうゝし雪ぬ乃　一千

ことゝ樹もうゝ雨ぬる　源山哉　南畝
多船のうゝ雪ぬ雪ぬ哉　南飛
市へ出ておあしふかゝる蔵うゝ　鬼卵
盆ゝを指薬屋やうゝの月　長洲
宇治て夢を作るあや谷のう　陳川
夢ゝ妻の奥のうゝる男人　郭公　田毛
山一ツ指ぬて行ゝ一ゝ迷哉　羽律
散花を砂濡ゝ春　竜亀　陳川
鰐口もなきゝてうゝる孫ゝ哉　鵜天
大井川二大名ぬかすみ哉　魏雀

巻頭

岡柏ふ　風腥し　夏山自　福良　花藏

月のうげ一ツハ殘れり　水　五恩

獨り行ハ及もなぬ岸の櫂哉　孤嘯

かくさぬ笠もなるを山櫂　金魚

稻妻やて窓の帰ぐらうえせ　里秋

蟹ハ書汚くもなきさ波中哉　吾栖

月ふゆゝ日ゝ書　秋乃ゆゝ　芦邨

糸萩ゝ細き卧猪の目元哉　百之

雛形の四畳ハそろ豆の月　二鵬

水ハ書立笠もしかさつたゝ　十日市　花蕚

涼しさや川風枝のよりゆるり　有馬　松圭

氷魚の灯ゝ表提ゝ蛍のうをさか　白

蝙牛や知ふさそれハ　代表角　除川

桃山や伏見遠ゝも又一人　茱萸

猿雅（サル）のふふ月のこゝ雪氷哉　兎卵

康上戸ゝ美ゝ弓ふ紀ゝ酒哉　芸芳

たまゝれて内て涼しさゝ多ゝ哉　我礼

ゝ多の沼ハ女美のゝ打ち哉　堤斧

積雪を拂しゝ中ふ菴ゝ哉　文賀

嬢ふあるゝんてハなし　初拾　百之

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

的雪や家中生魚の窓れ数　烏堂
そうりの涼ハ葉の名揺ぶ　兎卵
朝霧や茅を分り牛の息　长洲
縮森せて如けて去ぬや蔦し水　除川
仕ゝ人と一朱と一あむ沒ぶ　丁东
退屈の出ぶ吉笑や蔦ぶ　鵜遊
蔦のかしぶまたる日南ぶ　共雪
旅蓑屋の曙そうぶ蔦ぶ　田蓑
蔦うゝ揺ゝ湯谷と沼ぶ　楚岡
七夕や涼ゝ又葉茅の芙　鵜天

清しまん花かうゝ茶ぶ梅ぶ　楚岡
梅咲や生ゝ人あれゝ男つま　二鵬
初雪や蔦ぶ雪の足れ跡　鵜天
荒滝ゝ花の生ぶ涼しぶ　兎卵
涼ゝ森の志ゝうゝ夢ハ雅ゝぶ　京都 李蹊
新生ゝ雨の明ゝく鈴ぶ　同所 温故
俳句ゝ向て又おろぶ忘ぶ　除川
夏山の蔦ゝ出て蔦ぶ笑ぶ　兎卵
帆柱も風ごゝ湊ぶ　烏堂
初秋や鵜渡場江へ大おのこ　木虎

紫さくらを紅葉へ戦場や中元盛　吾栖
日盛や おしの水をきやうし　芋邦
雪解や 迷ひ子の家ゆ 素性宋　南畝
人さし角ぶへ 新さく芭蕉哉　一千
家布施 ゝ 祝衣 狩や 弾の経　源川
文ゝ入て 是ハ庭おき 暑ゝ事　長渕
井戸たゝ ゝ 汐瓶 元すく 暑哉　岡城
朝や 雪少 ゝ 居の百　文費
春ゝ 山 尻へぬけける 時鳥哉　苓棠
雪の日や 女の 碎く下駄の 泥　松圭

夜を惜む 撞の 夢きく 蕨哉　福良 花藏
出て 見ハ 周て 居られぬ 蟲の 郭　羽倖
白雨や 雲のく 晴れ 屋けくの　貝治
影ひさへ 濃 ゝ 大 雑哉　業茂
名月や 赤入 元 てない 蛍　田公義
元 鍾ふ きて ハ はゝ ゝ ゝ ぐんけ 花　金亀
出 女の 襟 新 ゝ きゝ ゆや 元 哉　其雪
去 ゝ 多 ゝ や 時 れハ 雑も 少 ゝ 止　三 二鵬
秋の ゝ ゝ 風 戯 物 芭蕉 哉　高親 亀遊
土 蛍 ゝ 雲あ ゝ を 仮 ん 雲 宮山　源川

蓼さく穂を高くうつし峰の月　芦仙
流氷をい氷きしまの流れ哉　里枝
日盛や蓼の流れの黄稜　黄稜
花ゆゑいつまでぬれて和尚哉　筠芳
汐蓼しまし又ぬるも惜しき時雨　里穐
晴うらと秋ハ早やうつる入日うら　除川
花ハ咲実ハ吹出ぬや綿畑　卦士
蓼の人ゆゑの哀ゆ同じ山路哉　除川
涼しさや船のゆ蓼に船ゆるし　東月
花の咲蓼ゆえて蓼ゆや雪の山　堤芳

徹夫ハ掘も苦しき川拾　魯鳥
破ゆゆや芭蕉ゆゑ度の月　棠林
一枝ハ京ゆえ桃や格の上　有風
涼しさの仏の雪や文の月　金毛
雪ゆ蓼ゆ風の吉野山哉　雪枝
さゆゆや釣計おろ仏三日月　鬼卯
涼しさやどうち吹て一軒家　里栖
鶴鈴ハ来人ゆ青ゆ星蓼　東烏
名月ハ歩ちの合ゆ哉ゆ　楚湖
雪の日や清へ近き海の色　ゆき白

出羽樓慶公とぢう月見哉　下東
月見えてうれしかるものハ花火哉　百之
風や八ちまきくゝと舟の淀　一千
躍えて去りとて残る星哉　雪枝
時雨や杉の下なる松ぶ青　魏雀
俳雪の中を洗ふや浮れの裏　蝙天
名の金を孫石と吸ま屋敷哉　泉汁
水色ハ沓さ動ぶ沈の蓑　吾栖
約束の笑ひ一条　蓉子　金竜
山表もうゝ粘ふや秋の山　源川

世のるや浪くゝえぬゆふ塔の尖　百之
夜ハ風ふるるを吹ぬ文の哉　鹿洞
紫金て居沙の月を蛍みず　孤芳
垣ほふ葛も枯ぬ住居哉　里樓
彩さ日や二度かりて運天後　一千
入おや桂漕ぬ方て舟ハ琴　菜芳
治聖酒を飲て夢ハ言　苍菜
蓼摘てうくゝ柳うゝ　雪枝
又接てうくゝ系ハ伊勢掘　我流
日条やふも又咲く森の梅　鬼卵

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

河州作之

臨川　五十一句
鵜天　六四句
栽禮　十五句
文貫　十句
魚文　三句

河州

楠葉
春芳　十四句
深野
圖城　七句
禁野
亀計　六句

鬼卵　六六句
苍蘭　六三句
長洲　十一句
立恩　九句
柏枝　一句

深野
里穰　九句
同
金息　六句
木屋
亀樂　五句

一三三

蓋寫
如藍　四句
養又
古道　三句
坂
負袴　三句
神田
蘆管　二句
牧方
兎助　一句
神田
塩瑞　一句

大坂

禁野
卦士　四句
木屋
孤嘯　三句
深野
刀州　二句
禁野
可清　一句
葛原
梅枝　一句

二鵲　六四句
百之　十七句
楚岡　十二句

寒白　六一句
魏雀　十六句
菓苑　十句

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

黄菱　六句
烏葦　五句
東烏　四句
菊竹　四句
有鳳　三句
氷花　二句
文窓　二句
青舎　一句
瑞馬　一句
君卿　一句

南瓜　六句
羽律　四句
丁東　四句
木虎　三句
楠芳　二句
孤芳　二句
殿城　一句
羅文　一句
東園　一句
桃一　一句

摂州

茨木
鳥養　星杖　七五句
吾栖　十八句
冨田
十日市　魯鳥　七句
田簑　六句
鳥養　連史　五句
西面　棠林　五句
穂積　鵠遊　三句
十日市　貝治　三句
奈良　万吹　二句

西面
中ノ城　雪枝　二十句
南畝　八句
茨木　筵菓　六句
目垣　百鳴　六句
茨木　路槿　五句
柱本　堤岌　三句
西面　雲栖　三句
有馬　松圭　三句
茨木　仙奥　一句

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

兵庫
蘆洲 一句
有馬
莫岐 一句
大塚
東枝 一句
十日市
南繁 一句
高槻
快山 一句

福良　淡州
一千 三十句
同
金毛 八句
同
芋邦 六句
同
花來 三句

坪井
錦水 一句
有馬
雪下 一句
十日市
花蕚 一句
高槻
亀松 一句
十日市
柳條 一句

同
花藏 十五句
同
東明 六句
同
楚調 六句
同
芦仙 二句

須本
虎洞 二句
須本
忻然 二句
桃川
河子 二句
小榎並
乙貫 一句
須本
朶十 一句
郡志
麦畦 一句

小榎並
鳳明 二句
鮎原
雨竹 二句
桃川
桃仙 一句
小榎並
碩茂 一句
福良
風篁 一句
郡家
苓桂 一句

京都
温故 一句
女
湖柳 一句

豫州
李蹊 一句
女
左柳 一句

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

三嶋 其笛 二句
中田井 卯秋 一句
越前敦賀 其雪 四句
和州飯貝 春意 二句
江州長濱 蝦蟇子 一句
日 寸法 一句
紀州熊野木本 呉鳥 二句
阿波三名 柳雪 一句
伊賀名張 風治 一句

奉納

願主

咲時を待て指ら柳 この中 鬼卯
この枝を濃重ぬ若葉や祈恵 我禮
吟座の第八ゑ柳の初葉哉 鵜天
花見ゑ見ゑ柳の河岸に皐月哉 臨川

おもしろく

洛行の水路船中

遥拜社

一ふく涼し　原東女集

佐太の月

年頃苦吟する句を江州辛崎の霊社に祈り奉る然
平愈しけり抜ひの幣捧の空て彩ふ拙き六百章を綴り
先師の高弟なる方賀老哲に撰を求めて三十番を
按摩を安永二癸巳六月廿日廣前に献奉る恐惶這般
鬼卵の一集成て世に弘内の祈に幸して巻末に加ふ
事尤のみ

河州佐太　黛山窟　蝸天

夜ハ森ハ中へかくして良夜哉
九重に包まれ小ふり八重さくら
世の中や松ハ蒼のかく家人
名ハ鶴を寄して舊き虎ゝ雨
雪とふ花を拾へと松の福

面白やあるじもさかる花の雪
如月西の海ふかい青ぬ菖蒲哉
日ハ暮て春ハ始るけふ今日の月
虫二丁の声ハ歩ひ嘶しうち
涼しさや月出て言ふ時ハ夢
蓼となれハ風も問む揺う那
小町よとをとゝしゆしれ花の色
雨まりも涼しきあるの音うれ
線花を芋植ま考多遅日哉
花ゆゑと名言ふ彩のいやえ哉

涼しさや松ハ生ふ苔ころ
門口て日和又て居ハ蛇半哉
星さへを垂ま柳の一葉う弟
涼しさや赤入きしくとうの音
笋や脱重ねうなしくりの
名月や破れさ屋根も格ら終次
出ハ帆より入帆涼しき真ゆ哉
裏枯や茨笠ゑせしぬり窓
泥鰌ゑや言ふ泥ふる雪佛
きしさや石ふ庄ゆつく水の音

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

風のよ絡の柳を清き水
永きヨやまゝ絡ゝぬ凡中れ糸
鶯ゝハ妻うけなゝん月の門
晏さりやまゝ一かしら瓜の健者
稲妻の疎てゆゆや金を藏

追加　浪花八十翁　方絮

堂ちなゝぬ
こと葉を和歌若葉うれ

奉納佐太社發句五百吟　河品佐太　栽々亭　臨川

秀逸十五番

春

氷ゝ梁上行ゝ美れ多
宇佐人も堂ゆさ一日や初日山
元日や半の通ゝぬ多ゆ縄ゝ
いと桂ゝハ田重をめさし礼河哉
雪ゝ入多れたし ゝ雪中
美苔や紙苔ゆるゝ赤ゝひき
雲のゝや森てくハえゝゝ苔礼穂

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

秋の日や海ふ立ぬしこのえ芋
鮎へ日のさし色し沙干す
茅ふき聖ふ影ハうえぬ泉寺

夏

よ河しを志やひ色ふ立ぬ色ふ
乃ふや右の文字ふも苔の花
蓮の花茂や御住の捨ふ舟
古寺や硯の池しもかんこゑ
夕ゑや之敷の中ふ色白き
樋の中を蠅もかよふや 泗泉

志の〻めや荻表の深し馬九鬣
夕敷の秋よく分ふり渡ふ根
名月や猪立い巻く 飯盛山
嫁の名も秋ゆゝて初る野菊ふ
秋の日や家へ帰る駒木曽
淋しさや鶏の下する蔦しも

冬〻

我山の赤ふ様紅やかさり松
冬川や流れしこのハ年をうり

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

14128

山乃てこまめかど拾ふ海走うる

追加

隅川の桂此の發句一巻を又る小子百枝花々
葉ゆり又実ゆ探ていたれるとり拾へき發句
ゆゝ孫六二巻さうち度神小哲くんを撰めと
こゝあさ内ゐて橘色香めてくれた式部さ第主ぬ
きてゆりぬのたいて再も共ゆゝ一巻を哲ぬ

今歳の春は　五流敬

梅の花　春門

863
66

書林
大坂和泉町
近江屋平次良板
藤谷汗青館

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』　請求記号 863-66
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『佐太のわたり』 請求記号 863-66

ガラス使用